

知っておこう
アイヌ文化

ハルイッケウ

イランカラプテ。太古の昔、国造りの神が人間のために野山一面に野草を用意したにもかかわらず、人間は野草の大部分が食物であることを知らないため、野草は毎年、ただ虚しく花を咲かせて散るだけで、その霊魂が祀られることもなく、泣きながら神の国へと戻っていく…。その様子を嘆いて、アイヌ語で「ハルイッケウ（食料の背骨：食料の中心となるもの）」と呼ぶ、ある二つの野草の頭領が人間の女性に化け、人間に野草が食べられることを伝えようとする…。そうした物語がアイヌ民族によって語り継がれています。さて、ハルイッケウとは、まず一つがアイヌ語でプクサやキトなどと呼ばれ、その独特な強い香りは病気の神をも遠ざけるとし、伝染病の流行時には必ず戸口や窓に吊るしたというギョウジャンニク。もう一つはアイヌ語でトゥレブと呼ばれる地下の鱗茎からデンプンを採取し、残った繊維も保存食とするオオウバユリです。物語では誰も食べようとしないハルイッケウを食べ、守護神として祀ったウラシペツという村の首領とその妻が、この上ない長者となり、子孫にも恵まれ、「飢饉や疫病が流行しても、ハルイッケウのおかげで救われるので、子々孫々に至るまで、決してハルイッケウを忘れず、食料として暮らしていきなさい。」と教訓を残し、人生を終えていきます。魂を持ったこの世の全ての物が、本来の使命を果たすことで喜んでカムイ（神）の世界へ戻っていく、だから、無駄にすることなく必要なだけ感謝して頂くことを忘れてはいけなと、ハルイッケウは現代の私たちに伝えているように思います。



アイヌ総合政策課 アイヌ総合政策グループ 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301

ようこそ！ウポポイへ白老へ！

沿道町民が道道の花壇整備と看板設置



道道白老停車場線沿道の4町内会（大町3、4、5、東町1）の住民らが6月20日、同道道約550mの花壇整備に汗を流しました。



ウポポイ開業で来町する観光客が車の中からでも楽しめるように一とおもてなしの心を込め、旧観光協会事務所と国道36号の間の沿道約100カ所の花壇を約2,100株のマリーゴールドで飾り、「ウエルカムロード花の道」と名付けました。



事業は町の「がんばる地域コミュニティ応援事業補助制度」を活用しました。大町第4町内会の奥村勇会長は「補助金がないとなかなかこのような大きな事業はできない。ウポポイ開業にあたり、来る人たちを気持ち良く迎え、喜んでもらいたい」と話していました。

白老ライオンズクラブ

（戸田克利会長・7月1日就任）



ソメイヨシノなど3種類の桜の若木5本を寄贈、植樹しました。

（7月3日）

ポロトミシタラ
魅力アップに貢献

苦小牧広域森林組合

（小坂利政代表理事組合長）

コシイプレザーピング

（神谷直秀代表取締役社長）

森林組合はトドマツ製の園路ゲート（高さ2.9m、横3.4m）と観光案内マップなど、コシイプレザーピングはプランター設置用木製枠50基を寄贈しました。

